

復讐物語 一編之下  
第四回

一編之下

松村春輔編次

茲に復英國の女帝も文久二年八月二十一日生來  
村に於て島津三郎侯の爲に擊殺せられたる國民  
の復讐を倣えんとし先づ幕府を攻めたり遂に贖金  
四十五萬元を奪ひ再び六月二十六日自國の軍艦

十艘薩州鹿兒島さつちゅうより来り同二十八日應接おうせつの違ちがひの  
 二第ふたつも去年八月二十一日閣下かくかの父ちちたる鳥津三郎とりづさぶろう  
 駕籠かごの者東海道とうかいどうめぐ罪無つみなき自國こくの商人あきんどを殺ころす  
 と閣下かくか既すでに好よく知しる所ところあり然しかるらし其その緯いとの関せ  
 きる外ほか二名ふたにを斬きるしけし者大傷おほきずを蒙あり亦また一人ひとりの婦人めいじんを  
 漸おそく逃にげ延のびたるも是こゝに閣下かくかの知しる所ところあり此人このひと  
 名なを左ひだりの記載きざいに閣下かくかの政府せいふに示しす

復三下

カルレス、レリキス、リチャルドフン 死しす  
 ホルラデイレ 婦人めいじんの名 逃去にせき  
 ウイルレム、カラルケ 深疵ふかきず  
 ウイルレムマルセル 同  
 右小掲書みぎのこがしよなる處ところの死亡あたまうし人又斬掛きりからるも又また逃にす  
 者ものの為ために三郎さぶろう彦ひこが行列中ぎやうれつちゆうの罪人ざいじんを求もとめ出だし其その  
 首かぶを我等前われがまへより斬落きるおちし又殺害ころせがらし逢あはたる者ものの親族おやし

深疵の者ハ分配為ヅル金とて四萬五千ポンドと  
贖ふべしと談判書と島津侯の執政河上但馬へ渡  
けるハ薩藩ハ兼之覺悟のとあるゆえ更ハ恐愕の  
体もあく同廿九日英國軍艦提督ハ答へぬ其の文  
ハいふ人の生命より貴まるのあつたれを人を殺せ  
るのハ必也捕へ死刑ハ行ふ當然の理ありゆより我方  
も昨年来罪人を捕へんと為るハ方今日日本國諸

後三ノ下ニ

侯の中ハ乱を起まるのあつてもつて此如き罪人を  
陰謀ハよりり捕へざるあり又島津三郎江戸  
ハ到るハ外人を殺せ為あつて國王と政府の仲人を  
做さんとして之の來社中ゆえ殊更人ハ殺害を命ぜ  
ざるに分明あり右の罪人を捕へたる時ハ早速長崎  
横濱の英國艦將ハ告げ知らせ自り來つて其の  
刑を觀るべし此事我方ハ先祖の神靈ハあつて

國辱を思ひ毫も偽るる緯あり然りとすべし元來  
貴國の人民我國禁を犯すをりたるの茲も及  
びあり去あぐり人の生命を害するも最も大罪  
小過ぎたるを知らず總て指揮する江戸政府の  
外國との條約中の古來より確定たる國の法律を  
加へざる事分明ありども我方も舊律に従ひ計は  
らざるなり畢竟大君政府の我等を苦しめたる策を

るべし若あつては必も御老中よとの書翰ある  
ぞ此の如き惡計あるをりて貴國と我等との  
間の爭論を醸せりと誠の恐愕する處あり蓋し此  
大事件を決せんゆゑ江戸政府の役員と我政府の  
役員と互に君が眼前にて是非を論じ罪人の一條を取局  
贖金のとを決まらば總て我政府も江戸政府の命  
に従ひ諸事を取行せんとも君が書翰に載する所

我方の隔意あり明の答ゆる事あり薩摩島  
津修理太夫執政河上但馬自記と書認めし書翰  
と英國公使を送りける

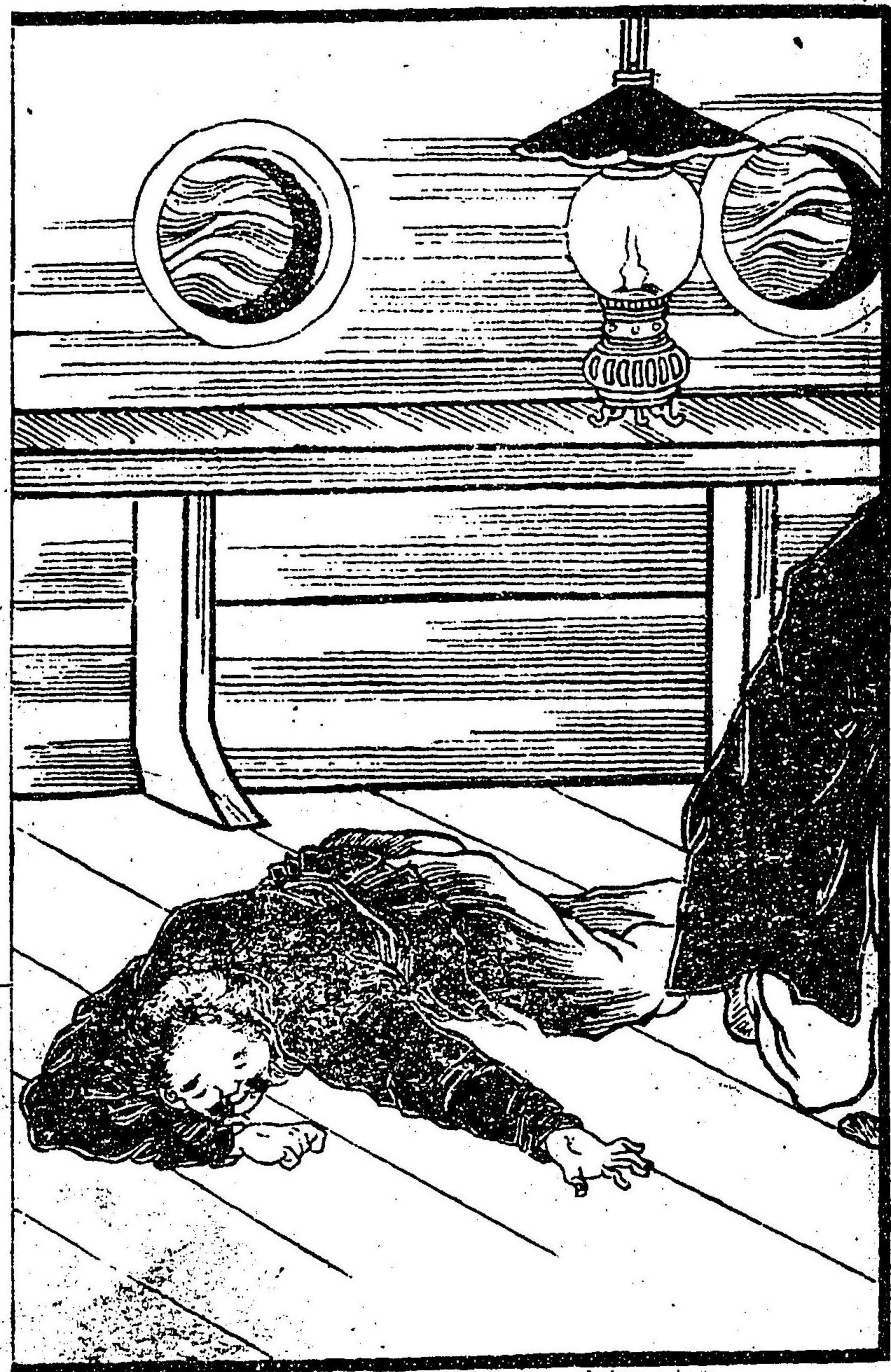
因りのこの段の應接書も當時英國龍動の新  
聞紙中の掲載在りし真説と其儘和解做しつ  
るなり故の句の体載る自然と譯書の如くあ  
るより更の作意を注意せざるより者官夫之と了

せよ

悉て英國の軍艦の件を答書を送るこりしとて文  
章 皇國文字ありしより譯官とて翻譯し其の  
文中を推察し豫め愛の起るを知る物より七月  
朔日再び島津侯よりの使節小艇に乗る来りし  
水師提督を使節の會せしとありぬ茲に又島津  
侯も愈愛ありたるべしなり國中の布令し海陸と

る小準備と做し何時もも交戦を做さばらと甲が  
やうとを試しあつた英國艦を其夕方一備四艘甲比  
丹の命を得て合圖と共に魚鱗を備へ乘廻りしが  
翌二日未明のころ鹿兒島の城下近く進み来り英  
船コケツテ船の島津族の蒸氣コンテスと云ふを奪ひ  
アルキユス船をシルジヨルジクレー船を奪ひリースホル  
ス船をエングランド船を奪ひつゝ遙か沖へ退きける

と島津勢を海岸臺場ありてこの有様を見るよ  
まも合圖を定め撃發せ然るも英船よりも發出  
は大砲の音天を響き潮を逆波を起しけるこの日  
俄の大風雨も島津勢を天幸ありと勢を愉らび第  
一番の臺場より序次を順あて發出せ其彈玉甲が  
軍艦の的當て多く破烈為りしり英艦大に恐るを  
あし先か奪ひつゝ三艘の船を不殘焼打けりこの時



城下のあつても甲が發出は彈丸の頻りも破烈し  
家一度の燃上り折柄をげに南東の風はやのう  
空中の散乱し港の五艘備へたる琉球國援兵の大  
船が吹着けるが忽ち黒烟空に覆ひおたつて隙の焼  
滅するを勇氣をげに島津勢少くもたゆまざる撃  
發は尖き數發の大砲が英船半を損害し又甲比丹  
のシヨスリング指揮官ウイレルモットの二人も戦死做

復讐三下七

いづれも英船を錨を上げ急か港を退きつて人あは  
浦の碇泊は同日朝より夕まで再び雨中を厭はせし  
英船備へを正しく港の方へ入り来るを島津勢  
は昨日の如く暫時烈しく發會けりし英船今も叶は  
らや思ひけん城中目的の臼砲を撃ち發しつて錨を  
あげて引退るを猶も得ずると臺場より頻りに砲  
發做せしを這に一艘の英船を彈丸を避んと狼



狙へて錨を抜かぬ暇なく遂に其の鏈を切棄て退げ去  
けるに薩兵は其錨を奪ひ三度凱歌を揚たりける  
其後兩國和親と作り島津侯より人を殺せし罪人  
の贖ひ金二萬丸を英國に與へたる時小至り英人  
等先小奪をせたる錨を請ひけるに屢あるに小  
戻り與へたる然るに萬國とも小敵艦の錨を奪へば  
之を新聞紙に掲載し四方に布告し其戦争の勝利

と示すに敵人も深く之を耻とせ和議作りたる  
敵人も其の錨を求めし若干の金を出し之を贖ふ  
べしを今英人の一錢を費さざしと取戻せしを  
島津侯の高義に感ぜしと然りとりのども未開の  
時小當り島津侯も各國の公議を知らざしと容易く  
錨を奪へしと鎖國攘夷の一徹心より現今文化の  
時小評せざる他邦を笑ひ備ゆるのと案下絶再説つ

島津中將も這度英艦と戦ひの始末を落もあへ  
葵問ありしを 敵慮斜めあへし薩長の兩藩へ  
御感書と賜し重く島津三郎を鞆下へ召し這る  
夷狄親征の緯ありしを 茲に復幕府を七月十四日  
我歸令の行しれざるを歎きし幕威を奮ひ復さん  
と謀り使番牧野左近村上求馬中根市之允を密監  
察使として伊藤八五郎鈴木八十五郎小監察を命

一傳三下 九一

づけしを 牧野等を百二十人附屬の兵士と卒連を  
中西國を巡視せんと同十五日蒸氣朝陽丸に乗る  
神奈川と發し十七日の夜淡路の岩屋を過る時徳  
島藩の臺場より中根等の船とを知らせ外國艦と  
誤りし隊長長坂貞治の指揮より大砲數門撃發  
し然るも幕使等の長坂の粗暴を怒り徳島藩の  
問はるしをりし隊長長坂貞治を割腹せし僅うめ

罪を謝せしむ。是後の話あり。徳りし程に朝陽丸も豊後姫島にあり。是より海路の嚮導とくく小倉藩阿野理四郎柳生兵衛の二人を乗せ同二十二日豊前田の浦より同國代里の港に入らんとす。長兵を擅の浦前田の臺場より既し砲發し速びしを幕使等大に噴恚と發し小監察を小艇に乘し長兵の屯所を遣らし結問め及びく處長州の参謀

高杉東行答ゆる中、縦に幕府の軍艦めをせよ。洋船を摸造する物をとくく撃發し速ふ可く如何とあるを洋船と誤り見し日本船と做し討せしむ可くあるやと當然の理に幕使等、今更陳ふる所を知らせ左近求馬も鎮西の監察めと中根の毛利氏へ使節の由を陳ゆるを左あを赤馬關へ来泊ありしと威を示しし促しめを詮方ありし幕艦を海

路と長門の方へ進む小長兵を臺場より砲隊の伍  
列と正し攘夷の國旗を風へ翻し陸軍隊を甲冑  
小身と固め雄氣堂々とし海岸を成りける小中  
根等も困却し應接さへる爲る能く長兵の指揮  
小任せ終り赤馬が関龜山の沖へ碇を卸し時小長  
洲奇兵隊の軍監吉田年磨とのへる者幕船朝陽丸  
小乗込と人籍を改むる小倉藩阿野柳生の兩人

幕使小左祖爲るとと責らる辨解做まへる手術  
のし船中へ自殺做したり恁く翌日幕使求馬  
左近の兩人も丸州路へ渡海し彼の地の事情を探  
索し八月中旬歸府做せし中根市之允鈴木八十  
五郎の兩人を同日其地へ上陸し毛利侯の新居城  
周防の山口へ来り幕府の命を陳ぐ後長門の舟木  
とりへる驛より浪士の爲へ暗殺の會しを這の

繹幕府へ所、けり、参政、小吏、至る、長州の粗暴  
過激の所業を憤り、或、歎き、恚さる、幕威の落も  
衰、と、大、ひ、愁、哭、做、せ、と、り、や

第十四回

再説七月十七日徳島藩の長阪貞治が幕艦を撃發  
せ、日の繹ありけり、朝廷、め、東園中将四條侍  
從と監察勅使と々々京師を發せ、む蓋、中將も

紀伊加田の浦、侍從、播磨姫路と巡視、做、り、み  
親兵、許多之と警衛、を、茲、亦、京師、浪士、等、徳大  
寺の家臣、滋賀右馬之、大、允、と、暗、殺、之、是、同、月、十  
九日の夜の繹あり、又、二十三日、姦商八幡屋卯  
兵衛と殺、三條河原、小、梟、是、復、浪士の所業あり  
と、世、人、諺、云、と、何、り、人、と、惡、を、家、鳥、小、逮、ふ、と、宜  
哉、茲、亦、是、越、前、中、將、春、嶽、侯、と、嚮、朝、命、と、復、た、は

浪士奸商  
外兵衛  
速捕



浪士奸商

くく京師を脱くかひけるか頃日再び 召か應く  
入京あつんと旅館と東山高臺寺か定めゆゆか二  
十六日の夜同院の庫裏方丈盡く焼亡は這る浪士  
の徒當春の歸國と擬まゆゆか朝敵の名を以て遂  
ゆ家鳥か至るの舉あるゆ陰か放火か及びくとを  
當時り一稿中納言か書と 朝廷か出くと云臣不  
才ゆくと時と知らま己まを圖らまくと叨ゆか恣

る大任と奉若罪復遣る所あく願く 朝慮至仁  
の旨をもつと臣が後見職と免せよ 朝廷素より  
中納言か倚頼まるとりつと復許允うま這の時將  
軍より歳々米十五萬石と 朝廷へ献せんとも願ひ  
諸朝臣か奏く家禄を増ま然る幕府を薩長のご  
とく外夷と交戦か遠ぶとを怖と鬼角か猶豫あら  
むを謀り諸藩へ陰りか布告為ゆと鎖港攘夷の

緯いとのまじり横濱表よこはまかあまじり甲等こうらと談判中だんぱんちゆうあるまじりかまじりを  
承伏まうりやくの有無うむ決けつせぎづるらちちち方かたより砲發たうはつあらど致いたす  
ゆづくとこの違ちがひを听きや否いな諸有士しよいうしも愈憤激いよふんげき此  
上うを御鳳輦ごほうねんを促うながし奉ほうり御親征ごしんせいの外手段ぐわいしゆんぱんあらど  
と薩長さつちやうの政府せいふか迫せまりける怒いかり程ほどか毛利中將もうりちゆうしやうを  
先達せんたつと自國赤馬じこくせくばが関せきかあまじりく攘夷じやういの先鋒せんぽうを做あし  
あらどまじりりまじりんまじりごまじり幕府まくふか阿陪あはいる諸侯等しよこうとうを更かららか

朝旨あさうしを奉ほうぜぎづるを茲こゝか一箇いつくわんの計略けいりやくを儲たくわひ大和おほへ  
行幸ぎやうきやうの緯いとを建白けんぱくあらどまじり朝議あさぎも速はやく決定けつていし毛  
利彦りひこの建言けんげん御採用ごさいようあらどせらるまじり八月十三日はつげふじゅうさん 朝廷てうてい  
大和おほへ行幸ぎやうきやうし神武天皇かむかみの御陵ごりやうを拜まがり而しかどまじり春日かすがひ  
山やまより攘夷じやういの御軍議ごぐんぎあらどせらるまじり可べき旨うし天下てんかの令れい  
と下くだりぬまじり之これを大和おほの行幸ぎやうきやうと云いふ同どう十四日じゅうし禁中きんちゆうか  
大臣たいじんを始はり在留ざいりゆうの諸侯しよこうを召めしまじりせまじりるまじり大御會議おほみぎぎの



上決する緯ありけん有栖川宮を夷賊追討大將軍  
か補せらる可き 御内意ありしを這の草莽の  
徒か听へけを時節漸く到来せりと雀踊くを  
愉快けるゆゆる幕府を是を憂ひ大和行幸ある  
とを天下の大事の遠がべし陰くは是を防ぐ  
示ぐと百方注せ意る折柄鳥取岡山米澤等の三藩  
及び徳島の世子等参内く攘夷御親征を止めん

と奏請做くふ小 朝廷敢く之と聴ゆを頻り  
小行幸の準備と急ぎぬ茲小復東武めく同十  
五日浪士等國學者鈴木重胤と殺せ蓋し重胤を嚮  
小塙次郎前田夏蔭等と共に安藤閣老の内意に依  
て廢 帝の緯を書をあらるべし十六日尾張前中納  
言と輦下召し大坂守衛の指揮職を命トぬ當時り  
大和の國小大椿事蜂發せり其の始未と尋ぬる小

先達て京師を脱し長州へ走り攘夷の支件小係と  
 既小先鋒を援けたる前の侍従中山忠光朝臣  
 適京師へ歸り事情を探る小幕吏等尚も因循し  
 朝旨を更へ奉せざるを怒り復も輦下を扇動せん  
 と浪花の方へ下らまはける這の時のことありけん  
 慷慨の和歌一首を詠じ某の侯へ贈らまはるる思ひ  
 きや小田の案山子の竹の弓引くこともあはく朽ちてん

便言三下 十七

〆の 悠りいりぢり小京師の浪士藤本津之助鏡石と松  
 本謙三郎三州形屋の人吉田寅太郎高知の人池藤太久留吉田重  
 藏前筑那須真吉酒井傳次郎尾崎次郎安藤嘉助伊藤  
 三彌完戸彌四郎森下儀之助同幾馬前田繁馬安積  
 五郎牧岡鳩平小川佐吉伴林六郎法谷伊豫作尾崎  
 傳五郎荒卷伴三郎中垣捨太郎鶴田陶司保母建田  
 所騰三郎楠目清馬岡見富次郎乾十郎大澤逸平竹

林八郎を始め其外各藩の脱士八十人計り大和河  
内の間小尊攘を唱へ義舉募らんと為る小中山忠  
光同論ある小より藤本松本等相謀り忠光朝臣と  
魁首と稱し同月十七日浪花を發し阿州狭山を打  
越る頃も同志追々馳集り殆ど千餘人小違びく  
勢ひ始小十倍し領主北條氏不軍使を遣り既小應  
接小違ぶやう這回攘夷 御親征在為らう小より

奸吏征伐し我等其先鋒たらんことを欲し願  
ししる領主尊王の志しを起し軍械借用致度旨強  
談小違ひける小領主北條氏も甲を制為ることを能  
らざりけん遂小浪士が請ふ小任せ大小砲馬具等  
を借與へけし是より軍律を定め隊伍を編と整々  
堂々として大和の五條小進撃し縣令鈴木源内の  
役邸を襲ひ源内外小吏長谷川泰次郎等の五人を



屠戮く糧米器械彈藥を奪ひ這の地は在陣く天忠  
組と號く縣下の人民は這度行幸の序次を示し  
更の五條近傍の地を天朝領と稱し田税の半額を  
蠲除し勢めく民心を救めけむる人望一時の寄  
るくまん間活再發茲亦同十八日京師よりあよ  
あは大凌くを出来たり今曉丑の刻とおろしき頃  
日の御門の邊り少く大砲の音響く否中川宮を

備前下

石薬師御門より参内做くたゆみ會津少將所司代  
稻葉長門守兵士多人數引卒く参内あり續り  
二條右府公近衛殿御父子徳大寺内府公火急の召  
めく参内ありしを夫より御築地内喜門日の御  
門公家門を始り四圍九門に至るも多き轉々と  
うち固め門戸を鎖し傳奏議奏國事掛りの堂上た  
まはらも参内を許可さるる因州備前阿波米澤彦

と始<sup>ト</sup>り<sup>シ</sup>め在京<sup>キョウ</sup>の諸侯<sup>シヨウ</sup>へ 禁廷<sup>キンテイ</sup>容易<sup>ユウイ</sup>あ<sup>ラ</sup>ざる<sup>ル</sup>大事<sup>ダイジ</sup>  
差起<sup>サヒ</sup>りぬ<sup>ル</sup>を各<sup>オノオノ</sup>必死<sup>ヒシ</sup>の覺悟<sup>ケツゴ</sup>あ<sup>ラ</sup>す<sup>ル</sup>即刺<sup>ソクシ</sup>参内<sup>サンナイ</sup>致<sup>ス</sup>な<sup>ル</sup>也  
づ<sup>レ</sup>先<sup>マ</sup>旨<sup>シ</sup>仰出<sup>オウデ</sup>さ<sup>ス</sup>毛利<sup>モリ</sup>中将<sup>チュウジョウ</sup>代理<sup>ダイリ</sup>在京<sup>キョウ</sup>の毛利<sup>モリ</sup>讚岐<sup>サンキ</sup>守<sup>シ</sup>  
と<sup>シ</sup>ぞ<sup>シ</sup>め<sup>メ</sup>長藩<sup>チヤウハン</sup>の者<sup>モノ</sup>一人<sup>ヒトヒト</sup>も<sup>モ</sup>参入<sup>サンニ</sup>叶<sup>ハ</sup>え<sup>ズ</sup>ざる<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>ひ<sup>ハ</sup>下知<sup>ゲチ</sup>  
せ<sup>シ</sup>ら<sup>ズ</sup>と<sup>シ</sup>又<sup>マ</sup>去<sup>ク</sup>る<sup>ル</sup>五月<sup>ゴゴ</sup>日<sup>ニチ</sup>の御門<sup>ミカド</sup>の固め<sup>カタメ</sup>を免<sup>メ</sup>ぜ<sup>ラ</sup>ざる<sup>ル</sup>  
島津<sup>シマヅ</sup>侯<sup>コウ</sup>も今朝<sup>コンアサ</sup>火急<sup>ヒヤク</sup>の御召<sup>ミモ</sup>め<sup>テ</sup>警衛<sup>ケイエイ</sup>のた<sup>タ</sup>ま<sup>マ</sup>づ<sup>レ</sup>先<sup>マ</sup>旨<sup>シ</sup>  
命<sup>ノ</sup>ぜ<sup>レ</sup>ら<sup>ズ</sup>と<sup>シ</sup>け<sup>レ</sup>ね<sup>バ</sup>召<sup>メ</sup>應<sup>オウ</sup>じ<sup>ム</sup>る<sup>ル</sup>五百<sup>イハヤヒ</sup>餘<sup>ヨリ</sup>人<sup>ヒト</sup>甲冑<sup>ケウ</sup>の身<sup>ミ</sup>を

復<sup>フタヘ</sup>下<sup>ゲ</sup>九<sup>ク</sup>二<sup>ニ</sup>

固<sup>カタ</sup>め<sup>テ</sup>野戰<sup>ヤセン</sup>の大砲<sup>ダイポウ</sup>引纏<sup>ヒキヂ</sup>ひ<sup>キ</sup>己<sup>ミ</sup>の刻頃<sup>キョクキョウ</sup>御築<sup>ミツキ</sup>地内<sup>ヂナイ</sup>へ馳<sup>チ</sup>せ  
集<sup>ア</sup>り<sup>テ</sup>开<sup>キ</sup>も<sup>シ</sup>嚴重<sup>ジュウジョウ</sup>く固<sup>カタ</sup>め<sup>テ</sup>たり<sup>キ</sup>然<sup>シ</sup>る<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>毛利<sup>モリ</sup>讚岐<sup>サンキ</sup>守<sup>シ</sup>吉川<sup>キカワ</sup>  
監物<sup>ケンモノ</sup>中將<sup>チュウジョウ</sup>の長臣<sup>チヤウシ</sup>益田<sup>マシタ</sup>右衛門<sup>ウヱモン</sup>之助<sup>ノスケ</sup>等<sup>ト</sup>御所<sup>ミヤ</sup>近邊<sup>キンペン</sup>へ駿<sup>ウマ</sup>  
動<sup>ウ</sup>の發<sup>ハツ</sup>せしと<sup>シ</sup>听<sup>キ</sup>やり<sup>カ</sup>迅速<sup>ジュンジュツ</sup>に<sup>ニ</sup>人數<sup>ジンズ</sup>を<sup>ヲ</sup>探出<sup>タンシュツ</sup>  
堀<sup>ホリ</sup>町<sup>マチ</sup>御門<sup>ミカド</sup>へ馳<sup>チ</sup>せ付<sup>ケ</sup>る<sup>ル</sup>門<sup>カド</sup>戸<sup>ド</sup>を<sup>ヲ</sup>閉<sup>ト</sup>じ<sup>テ</sup>入<sup>イ</sup>る<sup>ル</sup>こと<sup>ト</sup>叶<sup>ハ</sup>  
と<sup>シ</sup>是<sup>レ</sup>之<sup>ノ</sup>小<sup>コ</sup>より<sup>シ</sup>長兵<sup>チヤウヘイ</sup>を<sup>ヲ</sup>打<sup>ウ</sup>叩<sup>ク</sup>き<sup>テ</sup>叫<sup>ナ</sup>ぶ<sup>ル</sup>も<sup>モ</sup>  
内<sup>ウチ</sup>ゆ<sup>エ</sup>を<sup>ヲ</sup>答<sup>コタ</sup>ゆる<sup>ル</sup>者<sup>モノ</sup>も<sup>モ</sup>あ<sup>ラ</sup>ず<sup>シ</sup>陰<sup>カゲ</sup>う<sup>ケ</sup>の容<sup>ヨウ</sup>子<sup>シ</sup>を<sup>ヲ</sup>視<sup>ミ</sup>へば<sup>バ</sup>皆<sup>みな</sup>甲<sup>ケ</sup>

冒小身をうたぬ来もを討んと犇めくゆぞ長州方  
の壮士等怒憤面朱と瀑ぎ門戸を蹴破り追らん  
と為るを吉川監物是を制し遂に参内為るや否這  
回ひゆだ結局とも楮數も這小期を何をも第四編  
の始めの話分るを所結の

作者去大和の愛動坂町御門の顛末をう結る  
本篇の書綴らんと腹稿せしこの回頗ぶる

佳境の物語ゆゑ就中大和五條の戦争小藤本  
鎌石吉村寅太郎が智謀の出ぞ張良孔明の比  
まぐら自由の良策を設け松本謙三郎が伍子  
胥雲長が勇氣を振ひし條小至り楮數の限り  
の記載を能くしつゝを作者の本意あるをう結る  
まを第四編目の刊刻を急ぎ十五回の條行の  
こととて説出せを江湖の音官相愛らる御高

覽の程只管希望陳ちん少せう小せう多たん

編者 春輔再識

復古夢物語三編之下終

復古三下終

復古夢物語 四集 近刻

續開化千字文 壹冊 出版

柳橋新話 壹冊 既成

明治七歲十二月發市

東京書房

大嶋屋傳右衛門

政田屋兵吉



